

荒木山通信

2018年8月

第3号

荒木山の古墳
を顕彰する会

北房の古代が熱い！

上水田に在るさくもとクリニツクと北房薬局の間に、又丸集落へ通じる道がある。

国道313号線からこの道に入ると、緩い下り坂となり、やがて中国自動車道のボックスを潜ることになる。ボックスの手前の側道を右へ歩くと、JAの大きな倉庫が迫ってくる。その倉庫を右前方に見ながら進む。高野さんのお宅がある。高野さんのお宅のすぐ側を中国自動車道が通っているのだが、ここが弥生時代最終末の首長の住居とされる大型の竪穴住居跡だ。(遺跡は、道路敷となっていて現存しない。)

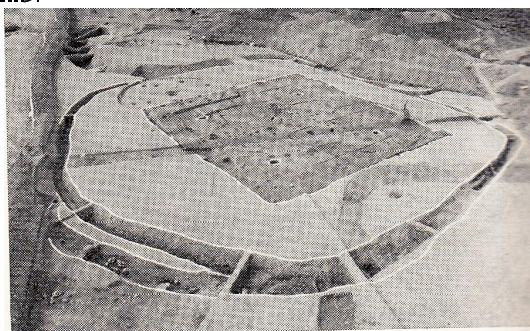
住居跡は、四角形で一边が一・二m、約一四〇㎡あり、他の住居が三〇㎡位である



今年、平成三十年
(二〇一八年)は、
大谷発掘三十周年
大谷・定古墳群
国史跡指定十周年

から、その差は際だってい
る。また、住居の外側三
四mに幅約一mの溝が廻り、
一般の住居と溝によって区
切られていることなどから
首長の館とされた。

この谷尻遺跡の発掘で多
くの土器が発見されたが、
特に注目されるのは、住居
跡の溝から出土した大量の
畿内系土器である。量の多
さに加えて、「甕・壺・高
坏・鉢などの器種もそろっ
ており、さながら畿内から
の移住者の集落といった感
じがする。」発掘担当者は、
こう記している。つまり、
三世紀の後半頃には、北房



【谷尻遺跡発見の首長の家】北房町史から

間仕切り溝の内側四隅に掘
られていた。一段高いベッド
状の遺構や炉の跡三カ所も
発掘された。

地域が畿内と親密に交流し
ていたことが伺える。
さて、この頃日本列島で
は前方後円(方)墳の築造が
始まり、やがて北房でも最
初の首長墳である荒木山東
塚が築かれ、この盆地に古
墳時代が始まる。
谷尻遺跡の首長の館、同
時期に築かれた荒木山の首
長墳、想像の翼が羽ばたく。
屋根を支える主柱の穴は、

ホタルと共に

暮らす

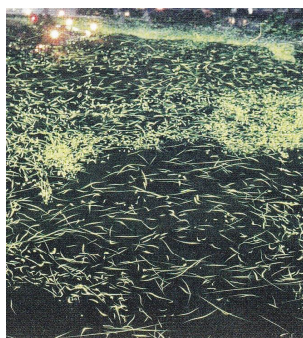
副代表 南條 保之

荒木山の古墳を顕彰する会

初夏の風物詩として親し
まれていたホタル。北房は
全国的にも有数のホタルの
棲息地として知られていま
す。地球上には二、〇〇〇
種類、国内では四〇種類の
ホタルがいると言われてい
ますが、その殆どが光を発
しなかったり、昼間に飛ぶ
ものもいたりします。

北房には、ゲンジボタル、
ヘイケボタル、ヒメボタル、
オバボタルが確認されてい
ますが、その他にもオオマ
ドボタル、ムネクリイロボ
タルなどが生息している可
能性があります。

ゲンジボタルとヘイケボ
タルは幼虫の時期を水の中
で暮らし、カワニナを餌と
する水生昆虫ですが、その
他のホタルは陸で暮らし、
カタツムリなどの巻き貝を



「ほくぼうホタルの里」パンフレットから

餌とする陸生昆虫です。
ホタルは一年で生涯を終
える昆虫で、北房を代表す
るゲンジボタルは五月中旬
から六月中旬にかけて飛び
交い岸辺に産卵、約一カ月
で幼虫となって水中に潜り
カワニナを補食しながら翌
年四月中旬に上陸し、土繭
を造って蛹となり、五十日
ほどで成虫となって飛び出
します。
古来より、人とホタルは
共存してきました。しかし、
現代ではホタルの棲息環境
はどんどん狭められてきて
います。
ホタルは環境のバロメー
ターとも言われており、ホ
タルの飛び交う北房は、人
にとっても住みよい環境と
言えます。

小殿御陵古墳の謎

上水田小殿集落の中ほど、田圃の中に土を積み上げたような小山が在ります。

ここが「小殿御陵古墳」で、地元では古くから「御稜様」と呼んで崇敬してきました。一説によると、この古墳の主は吉備津彦命の弟君、吉備稚武彦命であると言います。吉備津彦命は、四道將軍として吉備を平定したと言われ、稚武彦命も兄に従って活躍しましたが、小殿に住みこの地で逝去され「小殿御陵古墳」へ葬られたと言います。

しかし、これらのことは正史も何らの記録も無く、真偽のほどは判りません。さて、遺跡の悉皆調査では、遺跡番号二八一に「径一一・六m、高さ一・三mの円墳で南に開口する横穴式石室がある。また、墳頂に郡神社の御陵様を祭祀」とあります。

なお、郡神社社記には、「相当大なる前方後

円式なるも、破壊されて追跡困難」と記し、見取り図も掲げています。

さて、兄の吉備津彦命の墓と言われる岡山市の中山茶臼山古墳は、全長が一二〇mの初期の前方後円墳で、現在は宮内庁が管理しています。

小殿御陵古墳が吉備稚武彦命の御陵であれば、相当に立派な古墳でなければなりません。

現地を訪ねると、前方部を南へ向けた前方後円墳と見えます。前方部は全面が畑として耕作されており、後円部の頂上は深く掘り取られて痛々しいほどです。

実像は調査を待たなければなりませんが、気になるのは悉皆調査での横穴式石室の存在で、六世紀以後の

築造となり、時代的に齟齬を来すと思われる。



吉備の分国と北房

荒木山の古墳を顕彰する会

代表 久松 秀雄

吉備は備前、備中、備後の三国に分割された。あるいは、その時点で備後は既にあつて、吉備は備前と備中の二国に分割されたという説もある。

いずれにせよ、七世紀の終わりに、吉備は三国に分かれたが、この分国に際し、北房の地は備中国に入っている。

「北房は、なぜ備中国になつたのだろうか？」という疑問は、多くの方が持つて

いると思う。それは、地形から見て、北房は明らかに備前なのだ。阿口に源流を持つ備中川が南へ下り、盆地の中央辺りで南から来た中津井川と合流し、東へ流れを変え、備前国を流れて旭川へと合流している。弥生時代までは、備中川流域は一体で境というものは無く、古墳時代も陶棺を多用することや横穴墓など出雲の伝統が備前を通じて入っ

ていることなど、備前の影響が多く見られる。

分国の結果を端的に言えば、備中川流域から北房地域をチョン切つて、備中国へ編入したとも言える。ご承知のように、北房盆地は周囲を四〇〇m級の山並みに囲まれており、備中川沿いで備前地域へと通じる道が唯一平坦で安全な道である。

こうした状況にも拘わらず、北房が備中国へ属したのには、ヤマト政権の政略があつたのではないか。つまり、吉備の中核である備中国の首長たちへ新しい政策を普及、浸透させる役割を担っていた勢力が北房に居た。その為、北房を備中から離すことができなかった。備中に止める必要があつた。

なお、ヤマト政権の出先の役割を担った勢力は、北房の定古墳群の被葬者では



— 定東塚出土の金製環と金系 —

(「定東塚・西塚古墳」北房町教育委員会から)

ないか。

※吉備分国当時、美作国は無く、七・一三年に備前国から分国してできた。

残暑お見舞い申しあげます。

今年の夏は、記録的な豪雨の後、猛烈な暑さの日々でした。豊かな実りの穏やかな秋が待たれます。

秋には、荒木山の古墳の環境整備や調査事業も計画されています。多くの方の参加をお待ちしています。

古代史解明の鍵

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問 戸村 彰孝

深緑に彩られた端整な姿の箸墓古墳に蟬しぐれが冪し、背後には神の山・三輪山が屏風となり、前方には崇神王朝の跡を伺わせる纏向遺跡が展開している。

日本書紀で箸墓に祀られたとされる倭迹迹日百襲姫命を魏志倭人伝に登場する邪馬台国の女王卑弥呼であると説くのは、近年の考古学の進展を背景にしてとみに有力視されてきた。全長二八〇米の巨大な前方後円墳の後円墳は、三世紀の古墳時代幕開けを象徴する最大モニュメントとされる。また、姫と大物主命との神婚説話の悲しい物語は、愛の誠を訴えて胸を打つのである。

箸墓は、現在宮内庁の管理下において発掘調査は認められていないが、管理中に発見された祭祀用の特殊器台には吉備地方固有の孤帯文が施され、ヤマトと吉備

の親密な関係を示唆している。

箸墓と同じ古墳時代前期の京都・椿井大塚山古墳の主は、卑弥呼が魏に送った大夫で難升米とする仮説もある。この古墳からは、卑弥呼が魏の皇帝から贈られたとされる三角縁神獣鏡をはじめ多量の舶載鏡（中国製）が出土した。小林行雄は、この同範鏡（同じ鋳型の鏡）を各地の首長古墳

別に分類し、大塚山古墳の主からの分与関係を明らかにした。（「古墳時代の研究」）近畿・中国・九州・関東の広域に展開する十九古墳で三角縁神獣鏡が出土しており、奈良県佐妹田宝塚古墳の十二枚に次いで備前車塚古墳が十一枚の二位であった。さらに、このうち大塚山同範鏡は最多の四枚を記録し、特別な関係を伺わせているのだ。

備前車塚古墳は旭川下流左岸の湯迫の山麓に造られ、吉備最古の前方が撥型に開く後方墳である。墳長約五〇米で箸墓古墳の六分の一の相似形である。多量の神獣鏡の出土は、考古学関係者の注目を集めることとなった。

出雲には、宍道湖に注ぐ斐伊川が流れており、中流に出雲最古とされる松本一号墳がある。前方撥型の後方墳は、車塚古墳と相似形をなし、松本清張も「倭と古代アジア史考」の中で、吉備と出雲の濃密な交流の証左と指摘している。

古墳と相似形の前期古墳と位置づけられてきた。箸墓に繋がる、これら同期の三兄弟の関係を明らかにする課題が今、私達に与えられているのではないだろうか。



【三角縁神獣鏡】

日本史もの事典から

前方後円墳のルール

前方後円墳の形は、我が国固有のもので、鍵穴とか壺を横にしたとか言われていますが、はたしてそのルールは何処にあるのでしょうか。

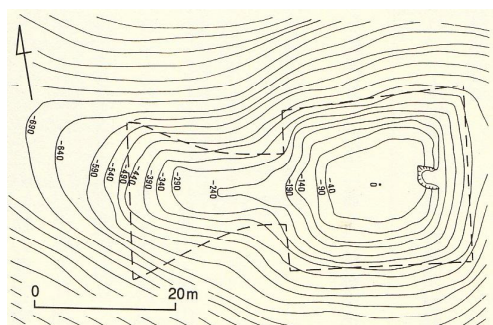
三世紀後半に前方後円墳は造り始められますが、その際列島各地から首長たちが集まって新しい墳墓の形を決め、首長の勢力やヤマト政権との関係性などから、墳墓の大きさや築造の日数、つまり、首長の序列を古墳に反映させたのです。

良の箸墓古墳では、吉備で製作された特殊器台と特殊壺が発見され、前方後円墳の決定に吉備が深く関わったとされています。

さて、前方後円墳の特異な形は、弥生墳丘墓がルールだとする説があります。例えば、倉敷市に在って、列島最大の楯築弥生墳丘墓は、南北に長さ約二〇mの方形の出っ張りがあり、その一方は峰に繋がり、一方は途中で深く掘り切ったと言います。

つまり、吉備の大首長の葬列は、一方の峰続きの出っ張りを通って径四〇mの円丘へと上っていたのです。円丘の頂上には、特殊壺の載った特殊器台がぎぎしく飾られて、棺の下には三〇kgを超える朱が敷き詰められるなど、大首長に相応しい品々が献じられました。

このようにして、弥生墳丘墓から前方後円墳へと変化したという説は、真実味を持って迫ってきます。なお、六世紀末には、前方後円墳の築造は終わっています。



【備前車塚古墳の墳丘図】吉備の古墳〈上〉から

【会員紹介】

アイウエオ順

天野 光暉 (監事)
石田 一盈
伊藤 輝子
井原 隆志 (幹事)
岩藤 昭
上谷 仁志
畦田 正博 (庶務)
大植 昭一 (幹事)
奥田 健治 (会計)
大柳 幸恵
岡崎 誠一
小田 寿夫
小田 裕章
角 清己
加戸 宏司
紙谷 吉明
川口與志継 (幹事)
黒田 秀男
斉藤 秀雄
坂本 信広
志田 浩一 (幹事)
武村 邦夫
戸村 彰孝 (顧問)
中山 進
中山 莊司 (幹事)

南條 保之 (副代表)
難波 正夫 (幹事)
西谷 寛 (顧問)
原田 重隆
久松 秀雄 (代表)
平城 元
本元 基司
三浦 明 (幹事)
宮田 美輝 (庶務)
山崎 和光 (監事)
山本 昇
山本 肇

三七名

(平成三〇年八月現在)

《入会のすめ》

趣旨に賛同し、入会を希望される方は、本会役員に
お申し出下さい。そして、
入会時に年会費三千円を納
入下さい。

会員へは、当会の活動状
況や計画をお知らせするほ
か、真庭市が開催する歴史
関係の講演会などもご案内
します。

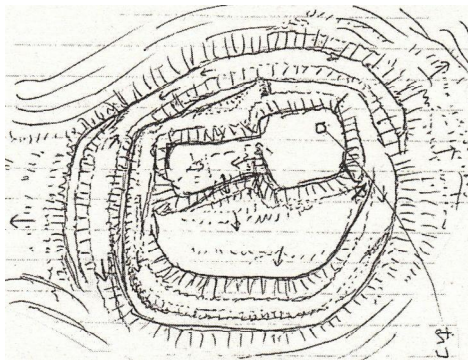
荒木山を訪ねて(その三)

東塚と中世山城

古墳時代の東塚ではなく、
中世の様子を知ること、
地域の歴史を知り学ぶうえ
で大切です。

東塚古墳は、中世山城(源
平・戦国時代)として利用
されていきました。

城郭の多くは、地名や山
名で「〇〇城」と呼ばれて
おり、荒木・宮前集落では、
「城崎」という名字、「城
御崎(前)」の通称地名など



【城御崎城見取図】

真庭市生涯学習課参事 森俊弘氏作成

から、「城御
崎城」とでも
仮称しまし
よう。

城の縄張り
は、西塚へと

続く尾根を堀切で遮断し、
墳丘南側に広い曲輪を確保
しています。そして、古墳

前方部南側を崩して平坦面
を緩やかな斜面につなげて
います。さらに墳丘及び南

曲輪周辺は、帯状に曲輪を
巡らせ、浅い谷筋と並行し
て土塁が築かれています。

北側からは広く水田平野部
が眺望でき、美作方面への
出入り口を指向できます。

構造面から「陣城」
としての機能の山城
と言えるでしょう。

東塚周辺には、こ
の外にも、「荒木城」
「福尾城」 「小殿城」
「小松城」 「四畝城」
などの城郭機構が散
在します。

史料では、「四畝
城」や「山王城(五
名)」、「佐井田城

から、「下中津井」などの山城は、
戦国大名の毛利氏と宇喜多
氏の抗争の様子を見ることが
できます。また、織田氏
と対峙の宇喜多直家の救援
のため、当時同盟にあった
毛利輝元が、勝山高田城か
ら陣を「水田」へ移したと
あります。

水田在陣の場所はどこか。
多くの軍勢が布陣・駐留で
きる陣所としては、丘陵上の
「城御崎城」や「荒木城」、
「福尾城」などの城郭に比
定されるかも知れません。

中世山城として幾多の歴
史を刻む東塚や周辺の城郭
の正確な図面は無く、圃場
整備で地割れが失われた平
野部と合わせて、今後の基
礎調査が望まれます。

※ 真庭市教育委員会参事 森
俊弘氏の歴史講座「中世の荒
木山東塚古墳」からその一端
を紹介しました。

◎ 「荒木山通信」は、北房
振興局・北房文化センタ
ーにあります。

◎ 「荒木山通信」は、北房
振興局・北房文化センタ
ーにあります。

◎ 「荒木山通信」は、北房
振興局・北房文化センタ
ーにあります。

◎ 「荒木山通信」は、北房
振興局・北房文化センタ
ーにあります。

◎ 「荒木山通信」は、北房
振興局・北房文化センタ
ーにあります。